

卒業論文の要旨

論文題目	SF 作品における奴隷的描写のメカニズムの考察 ーなぜロボットが自由の象徴になるのかー
氏名	川辺一夢
メジャー	哲学
(要旨) 本稿では、SF 作品、特に SF 映画に登場するロボットが意図的に人間のように描写される理由と、その描写がもたらす意義について考察する。近年のロボット倫理学においては、ロボットが人間らしく振る舞うことによって人間側がロボットを「人間のように」感じるという関係論的アプローチが主流になりつつある。本稿ではこの関係論を理論的基盤とし、SF 作品におけるロボットの人間的描写がどのように機能しているかを明らかにする。 研究の背景には、多くの SF 作品において AI やロボットに人間性を見出す描写が見られること、またその際にはしばしば自由や平等といったテーマが扱われることが挙げられる。これまでのロボット倫理学で議論されてきたロボットの道徳的主体性が、フィクションの領域においてどのように形象化され、作品内で機能しているのかを考察する。 具体的な分析方法としては、SF 作品『DETROIT: BECOME HUMAN』『アイ,ロボット』『ブレードランナー』の三作品を題材とし、作中でロボットが人間に近い存在として描かれる演出や、奴隷的な立場に置かれている描写を整理・検討した。これらの作品においてロボットは鑑賞者にとって人間であると認識され、そのロボットを通じて自由や平等、開放といったテーマを伝える手法として効果的に機能している。また、自由や平等の欠如や強奪を、現代や未来のアクチュアルな出来事として捉えることが可能になる点で、人間を描くよりもロボットを描写した方が効果的である。 このように、SF 作品でロボットが奴隷のように描くことは、自由や平等といった倫理的なテーマを人間の奴隷といった歴史的な出来事ではなく、現代社会の延長として投げかける役割がある。	
(指導教員の推薦のコメント) 本稿は、SF 作品において AI やロボットがしばしば奴隷のように描かれる理由を論じている。著者は、著名な三つの SF 作品に登場するロボットの特徴や、人間から受ける扱いを丹念に分析することによって、ロボットの奴隷描写が(1)リアリティのある人権問題の表現として機能し、(2)人間を客観的に捉え直す舞台装置としても有効に作用していることを、適切に指摘している。その結果、これらの SF 作品がフィクションでありながら、現代の読者・視聴者の心を強く動かし得る魅力を明らかにした点は高く評価されるべきである。 また著者は、近年のロボット倫理学の成果に言及しながら、ロボットの道徳的主体性について検討しており、単なる物語分析にとどまらない奥行きを本論にもたらしめている。こうした哲学的議論との連携を背景に、具体的な作品事例を通じて文化表象を考察した成果は、優秀卒業論文として推薦に値する。	